HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二部　部局史.　保健管理センター
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 1249-1251
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28211
Type	departmental bulletin paper
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_1249.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

保健管理センター

保健管理センターは、一九七二年に設置されたが、その歴史は一九二五年以来の学生生徒診療所に遡る。その任務は本学学生、教職員の保健管理に関する専門的業務を一体的に行うことにあり、一九七三年一月十日より現建物において業務が開始された。初代所長高橋香織医学部助教授（翌年教授に昇任）の下、内科、耳鼻咽喉科、眼科、歯科の四科でのスタートであったが、この陣容で任務を遂行することは困難で、設置当初より医学部附属病院および歯学部附属病院の全面的な協力を仰いでいる。

これまでのセンター常勤医師を挙げると、所長は高橋香織（一九七二～八六年）、木下眞二（一九八四～九四年、八六～九四年は所長）、本間行彦（一九八七～二〇〇〇年、一九九四～二〇〇〇年は所長）、武藏学（二〇〇〇年～）であり、内科には櫻田惠右（一九九六～九九年）、大塚吉則（一九九九年～）、整形外科には石井清一（一九七六～八三年）、佐々木鉄人（一九八三～八八年）、松野丈夫（一九八八～八九年）、荻野利彦（一九八九～九〇年）、三浪明男（一九九〇～二〇〇〇年）、鐙邦芳（二〇〇〇年～）、精神科には小林義康（一九七三～七六年）、岡田文彦（一九七六～九五年）、傅田健三（一九九五年）、伊藤ますみ（一九九五～九八年）、小林理子（一九九八年～）、歯科には五十嵐敏子（一九七三～八五年）、山口昌子（一九八五～八七年）、楠本哲也（一九八七～九〇年）、鈴木由美子（一九九〇～九五年）、今井徹（一九九五～九七年）、大久保留加（一九九七年～）が在職した。この間、一九八六年には眼科、一九九五年には耳鼻咽喉科の診療が廃止され、現在は内科二名、整形外科、精神科各一名の医師、一名の歯科医師が常勤し、カウンセラー三名、薬剤師二名、診療放射線技師二名、臨床検査技師三名、看護婦三名、歯科衛生士一名の体制で、ほぼ通年の健康診断と午後の外来診療を行っている。学会活動についても、当センター主催で「全国大学保健管理研究集会」が第一七回（一九七九年）、第二七回（一九八九年）、第三七回（一九九九年）の三回開催され、北海道地方会事務局も長く担当し、その運営に大きく寄与している。

本学を取り巻く状況は、設置当初の大学紛争の時代から大学院大学への移行と大きく変化した。学生数は留学生

を含めて増加し、かつ多様化している。これに伴い当センターの業務も増大し複雑化しているが、一方、全スタッフ数は二〇年前と比較して四〇名から二十数名と半減している。当センターは設置以来一貫して、学生、教職員の健康維持、増進に努めてきたが、（一）生活習慣病予防のための健康教育の充実、（二）ストレス増大に対するメンタルヘルスの充実、特に学生相談室、学生委員会、クラス担任、当センターとの連繋の強化、（三）一九九九年の「結核緊急事態宣言」（厚生省）への対応、特に胸部X線撮影による早期発見、などの課題があげられる。健康診断受診率向上のための努力がこれまで以上に必要であり、環境がより競争的になればなるほど、当センターの意義、責任がさらに重くなることを認識し、学生、職員の健康維持、増進のために努めていきたい。

（執筆　武藏学）